寂莫のまどろみも去り吐息なす憂悶の日も えれ白き辛夷よ

オホー ツクの水やわらぎて

流光の 彷徨のい着きしを知る の群札 める国 に

朽葉ぬき 頭 もたげし若き息吹

は

わが若き日の昏迷を掻く

輝ける太陽に酔い痴れた。 の たいき あお て

ー \*\*\*\* \*\*\* \*\*\* かだつみの青をば追わん 高澄の日高の峠

筋骨は火照に燃えぬきなる。ほでりません。 つぎ きか ひ むね うずエゾマツの深き樹林 ああ慵げき虚を破りて を 渡 た 及る雄ぉ 叫がび

わが若き日の胸に響かん

の曠野に励 野末遙 ぎ はけき

地の熟睡静かに温むた達の真情を凝らした。

白鱧々 々と六華は咲けどがいりつかっさ

うす月は雲をどよませ

邂逅に結ぶ灯火がとう むす ともして逆巻の吹雪は狂! う

わが霹靂の痕を印さん (\*\*\*) まない も しる 明晰な 眼 を持ちて凝媚 濃き鈍色ににじみそめつも 手をとりて声を落さじ を持ちて凝視る道に

小 ĬΪ 脇 地 徳 炯 人 君 君 作 作

Ж 歌